

木簡史料紹介——牛札——

石 上 英 一

勤務先の東京大学史料編纂所の採訪調査で見出した木簡に関する史料を一つ紹介したい。天保元年（一八三〇）に生まれ、明治三十七年（一九〇四）に没した神道家（金刀比羅宮の神官など歴任）であり国学者でもあった松岡調は、自ら掌る多和神社に因んで多和文庫を開き蒐集した文書・典籍、古器物を収めた。この多和文庫（松岡弘泰氏所蔵。香川県大川郡志度町）は、幕末から明治期において一個人が成した文庫としては、全国でも数指の中に入るものであることは間違いない。史料編纂所では、明治二年・昭和六年に調査したが、更に昭和五三年・昭和五七〇年と調査させていただいている

『東京大学史料編纂所報』一四号、一九七九年三月、科学研究費による研究報告。同一八号、一九八四年三月、採訪調査報告。同一九号、一九八五年三月、採訪調査報告。松岡調には、学界誌に掲載された論文の他に、自筆史料集・考証及び日記『年々日記』一五四冊（文久四年（一八六四）～明治三年（一九〇二））があり、更に刊行を前提として執筆されていたと考えられる未完の『新撰讃岐国風土記』二四冊（第二稿本二冊〔香川郡〕と浄書本二冊〔大内・寒川・三木・小田〕一部欠）・阿野

・鶴足・那珂・多度郡）がある。松岡調は、若い頃、嘉永六年（一八五三）序をもつ（公刊は翌七年）梶原景惇・景紀父子撰『讃岐国名勝図絵』の刊行にあたっては、絵図の版下の縮模を行って大いに貢献している。その際の経験が、同書を上回る香川地方誌の大著撰述の一つの動機となっているのであろう。この『新撰讃岐国風土記』寒川郡之部第二冊志度郷の末村の条に「牛馬の祈禱」の項があり「牛札の図」が掲載されている。「牛馬の祈禱」の文と「牛札の図」の積文と図を次に掲げよう。

牛馬の祈禱

当村にて、四月の末つかたに、牛馬の祈禱と云を、行へり、其ハ社、神官を請して、牛馬安全を、かたらへるなり、其時牛馬を飼へる、其家毎の童、牛の札と云を、持来りて、神前に置いて、祈念を乞へるなり、其牛の札と云ハ、木片を鎌以て作りたる、不規則なるものなれど、尽く保食神と、記したるなど、理も能く聞ゆるが、古雅なる物にて、大小新古あり、他村にてハ、聞かぬ支なれバ、其牛の札を図にして、次にいたせり、

牛ノ札の図

常ハ、上に穴あるに、麻紐を通して、
牛屋の柱に掛たり、
（牛札一紙文三寸二分）
「瓊保食神 守護」

(牛札二原文)
「瓊保食神午馬如意安全」
一尺一寸

七寸 (牛札三原文)
五分「瓊保食神守護」
余

松岡調は絵画の模写に秀でており、『新撰讃岐国風土記』にも文書や古器物の細密で正確な縮模図が多数収載されている。「牛札の図」には三枚の牛札が模写されているが、その形、文字は正確に縮模されていると考えられる。一は長さ三寸二分、二は長さ一尺一寸、

三は長さ七寸五分余とある。牛札一は〇三三または〇三三型式、牛札二は〇一一型式、牛札三は〇三三型式と見られる。いずれも麻紐を通して牛屋の柱に掛けるため上部に小孔が穿つてある。保食神(または瓊保食神)の神名の書かれた呪符木簡の一種と見なしてよからう。他の類似の民俗例の有無、保食神と牛馬の安全守護との関係、この牛札が明治以降現在までどうなっているかなど全く調査考証を加えることができないが、とりあえず史料に記された呪符木簡の一例として紹介する次第である。研究の一資料となれば幸いである。

牛札の圖

常はよみ穴ありに麻紐を通りて、牛屋の柱に掛りて。



三寸二分

瓊保食神午馬如意安全

一尺一寸



七寸五分余